－山口県－

お節介おばさんパワーでわくわく活力のある浜に

山口県漁業協同組合和久支店女性部
中　津　喜　美　子

１．　地域の概要

私が住んでいる下関市豊北町和久地区は山口県の北西部に位置し、日本海に面している。
（図）

図　下関市の位置図

２．　漁業の概要

山口県漁業協同組合和久支店の正組合員数は 52 人、准組合員数 32 人で、主な漁業は、アジ、ブリ、イサキなどを漁獲する一本釣漁業や、アワビ、サザエ、ウニなどを漁獲する採介藻漁業などの他、中型まき網漁業、小型定置網漁業が 1 ヶ統ずつあり、平成 25 年の水揚げ金は 1 億 3,000 万円である。

３．　グループの組織と運営

山口県漁業協同組合和久支店女性部は、昭和 31 年 6 月に設立され、当時、約 120 人いた女性部員も現在では 43 人に減少したが、お父ちゃんたちが元気に海で操業している間、家や地域を守るのは私たち女性部であると自負しながら活動を行っている。

主な活動は、高齢者福祉活動、環境美化活動、部員の交流促進などである。

４．　研究・実践活動選定の動機

女性部で特に力を入れてきたのが高齢者福祉活動である。

私たちの和久地区では住民の高齢化が進み、独居老人が増えてきた。このような方たちが生活に寂しさを感じたり、家に閉じこもることがないようにと、月に１回、高齢者が集うサロンを開いている。

サロンでは、高齢者ができるような折り紙、ゲーム、踊り、日帰り旅行などを行っている。（写真 1）

写真１　高齢者サロン

その他にも、国道沿いの荒地に花壇を造ったり、「海岸清掃」などの環境美化活動も積極的に行っている。

こうした活動の多くは平日の昼間に行うため、仕事を持っている部員は活動に参加することができず、部員同士のつながり、活動への意識が薄れてしまう。

これを防ぐために、月に 2 回、昼間の活動に参加できない人たちが中心となり、夜に銭太鼓の練習をしている。(写真 2)

銭太鼓の練習は、女性にとっては家庭から離れてひとつのことに没頭できる息抜きの場でもあり、また部員同士の交流を深め、日ごろ活動に参加できない部員に活動の進捗状況、地域の状況を伝えるなど情報交換の場ともなっている。

写真 2　銭太鼓の練習

こうした活動を通じて、地域を盛り上げていこうとがんばっているが、女性部自体の高齢化も進んだことにより、今後の活動に不安を感じることもあった。

また、下関市豊北町は、漁業者の高齢化率が 65%を超えており、著しく漁業が衰退している地域であるため、「このまま漁業の衰退が続くと、地域はどうなってしまうのか」と皆が不安に思っていた。

このような中、和久地区に新規漁業就業者（以下「ニューフィッシャー」という）が移住してきたこと、また和久地区に道の駅がオープンしたことを契機に、地域活性化に向け新たな活動に取り組むこととなった。

５．　研究・実践活動の状況及び成果

（１）新規漁業就業者の支援

4 年前、私たちの和久地区にニューフィッシャーの H 君がやってきた。(写真 3)

H 君は、他県出身で、縁もゆかりもないこの山口県で漁師になりたいと希望し、国の新規漁業就業育成事業を利用して漁師さんのもとで研修を受け、現在では独立して立派な漁師さんとしてがんばっている。

写真 3　ﾆｭｰﾌｨｯｼｬｰの H 君

H 君が和久地区に来た当初、私たち女性部員は彼のことをまったく知らず、話をすることもなかった。

そんなある時、私は、他の地域のニューフィッシャーと話をする機会があり、「地元の浜のお母ちゃんたちが僕に話しかけてくれる。地元の人に無視されると寂しいが、声をかけられるとうれしいし、安心して地元に溶け込むことができた」と言っていいたのを耳にした。

私はこれを聞いた瞬間、胸がドキっとした。

「もしかしたら、他県から来て和久地区に知り合いがいない H 君は寂しい思いをしているのでは。せっかくこの町に来てくれたのに孤立しているのではないか」といろいろなことが頭をよぎり、ニューフィッシャーの H 君が安心して私たちの町に溶け込むために、できることはないかと悩み始めた。

漁師さんは危険と隣り合わせの海の上に一人で漁に出るため、漁から帰ったとき「魚は獲れたかね」と地元の人たちが声をかければ、H 君もホット安心するのではないか、また和久地区で生活する上でも、地域の人とのつながりが大切なのではないか。

まさしくその役目は、普段浜で接する私たち地元の和久支店女性部が担うべきだと思った。

そこで私は「積極的に H 君に声をかけよう」と女性部員に呼びかけを行った。(写真 4)

和久の女性部員はおしとやかで恥ずかしがり屋が多いため、最初は一声かけるのもためらっていたが、「声をかけてね」と何度も呼びかけを行っているうちに、今ではみんな自然に声かけができるようになった。

写真 4　声かけ要請

中には、独身の彼のために、おかずを作っておすそ分けをしたり、結婚を心配する部員もいる。

H 君には「お節介なおばさんたちだなぁ」と思われているかもしれないが、次第に彼から私たちに話しかけてくれるようになり、笑顔も増えてきた。

さらに今では、H 君が獲ってきたウニの処理も女性部員が手伝っている。漁師さんが獲ってきたウニは、奥さんや家族の協力を得て、殻むきや異物の除去、板に並べるという作業を通して、板ウニに仕上げる。しかし、地域に知り合いがいなく、独身の H 君には作業を手伝ってくれる人がいない。

そこで見かねた女性部員がお父ちゃんのお手伝いのついでにと、自然にウニの処理を手伝うようになった。

これも私たち女性部員が「お節介おばさん」として積極的に声をかけ、H 君を浜の仲間として思うようになったからこそ、自然に手伝うことができるようになったのだと思う。

ある日、浜で立ち話をしている時、H 君が「和久の人たちはやさしいね」と言ってくれた。これを聞いた瞬間、私たちの取り組みは間違っていないと確信した。

私たち女性の「お節介おばさんパワー」こそ、ニューフィッシャーが地元に定着する秘訣だったのではないかと思う。

H 君は少々の時化でも海に出ている。高齢化により出漁回数が減った浜の父ちゃんたちも次第に若くエネルギッシュな H 君に刺激を受け、以前よりも漁に出るようになり、浜に昔のような活気が戻りつつある。

（2）イベント「わくわく漁港(みなと)祭り」の開催

平成 24 年 3 月、和久地区に道の駅「北浦街道ほうほく」がオープンした。(写真 5)

道の駅の眼下にはお父ちゃんたちの船がある和久の港があり、水平線には CM にも取り上げられ、「一生に一度は行ってみたい」と話題になってい

写真 5　道の駅オープン

る角島大橋を望むことができる。

道の駅の来場者から、「和久の港と青々と輝く海とのロケーションがすばらしいね」との話をよく耳にしていた。

私たちには見慣れた風景だったが、自分たちが住んでいる場所そのものが、実は観光資源にもなり、これを上手に利用することで昔のように活気ある浜に戻し、そしてそれをニューフィッシャーの世代につなげていくことが可能なのではないかと強く思うようなった。

そこで、私たち女性部から「地域を盛り上げるために、また、地域を PR するために何か新しい取り組みをやろうよ！」と漁協や男性陣に投げかけを行った。

ちょうど、道の駅から漁協に「地域活性化のために何か活動を行わないか？」との相談もあったことから、すぐに皆の賛同を得て、男性陣、女性部、漁協による検討が始まった。（写真 6）

写真 6　検討の様子

話し合いにはニューフィッシャーの H 君も参加してもらい、若い人の意見も取り入れていった。

何度も話し合いを重ね、平成 25 年のゴールデンウィークの 3 日間、和久漁港で「わくわく漁港祭り」と銘打って、イベントを開催することを決定した。

イベント内容は、男性陣がサザエのつぼ焼きと東北復興支援のためにホタテの網焼きを、私たち女性部はふぐ汁、加工品販売を担当し、和久地区の水産物を多くの来場者にＰＲしていくこととなった。

そして迎えた祭り当日。道の駅の協力を得て、チラシ配布や道の駅の HP で宣伝していたこともあり、販売開始前から長蛇の列ができていた。（写真 7）

販売中も常に行列が途切れることなく、祭りを実施した 3 日間で約 2,000 人が来場し、祭り全体の収益は約 101 万円であった。

私たち女性部が準備したふぐ汁も午前中に売り切れるほどの人気ぶりで、大勢の方に私たちが用意した海の幸を味わっていただくことができた。

天気が良かったこともあり、港内の岸壁で座って食べる来場者も多く、和久の港から見える景色も楽しんでもらえたことと思う。（写真 8）

イベントでは、来場者に和久地区のＰＲが出来たのに加え、地元の方とニューフィッシャーとの交流も深まり、何よりもみんなが地域を元気にしたいという目標をもって活動し、一体感が生まれた瞬間であった。

イベント終了後の次回に向けた反省会では、初めての祭りだったこともあり販売方法や会場設営について男性陣と女性部とで意見が衝突した。しかし、そこは女性としていらいらせずに、じっくり話し合うことで男性陣を納得させ、最終的にはこれからも毎年「わくわく漁港祭り」を開催しようということとなった。

平成 26 年 5 月には第 2 回目の「わくわく漁港祭り」を開催し、今年 5 月にも開催を予定している。

このようなイベントを通じて、男女問わず、皆が同じ目標を持ち、前向きな姿になったことで、浜に活気が戻りつつある。

写真７　わくわく漁港祭り当日

写真８　岸壁に座ってくつろぐ来場者

６．　波及効果

これまでの活動から、「自分たちの海にもまだまだ素晴らしいものがたくさんあるのに、利用できていないなんてもったいない。少しでも地元のものを来場者に提供したい」との想いが大きくなった私たちは、次のステップに向けて行動を開始した。

それは、祭りなどのイベントだけではなく、弁当の宅配や、道の駅での販売などを行うことである。

この実現に向けて、早速行動を開始し、地元の魚介類を利用したお弁当を作り販売しようと女性部で目標を立て、昨年 10 月に食品衛生法の許可を取得した。（写真 9）

今は弁当のレシピ開発や販売方法を検討中である。

写真９　食品衛生法の許可取得

７．　今後の課題や計画と問題点

夢で終わらせず、一歩ずつ前進していく。これからが私たちの力の見せ所である。

これからも楽しく活動を続け、住んでいて“ワクワク”するような元気な地域となり、たくさんのニューフィッシャーが和久地区に定着することで、昔のような活気ある浜を取り戻していきたいと思う。

そのためにも、これからも「お節介おばさんパワー」を発揮し、ニューフィッシャーだけでなくお父ちゃんたちの尻を叩きながら、浜の仲間とともに地域が活性化するようにがんばっていきたい。（写真 10）

写真 10　和久支店女性部員